

派遣者番号	管 R 5 K 0 2	氏 名	上 床 肇
研究主題 —副主題—	ウェルビーイングを高める学校教育の在り方 —事例研究を通じた新たな働き方、価値観創造の提案—		
派遣先大学	帝京大学大学院	指導担当 者	建 部 豊
所属	八王子市立みなみ野中学校	所属長	白 石 貴 志

キーワード：ウェルビーイング 働き方改革 心理的安全性 特別活動

要旨： 文部科学省は教育振興基本計画（2023）において、教育を通じて精神的な豊かさや健康までを含めて幸福や生きがいを捉える「ウェルビーイング」の向上を目指すとした。また、子供たちのウェルビーイング向上には、教員のウェルビーイング確保が必要であるとした。しかし、現在、教員の長時間労働は深刻な状況であり、東京都教育振興基本計画「東京都教育ビジョン（第5次）（案）」内の「基本的な方針 11」に示されるように「学校における働き方改革等の推進」と、それによる教員のウェルビーイング向上は喫緊の課題である。一方で、ユニセフ報告書（2021）によると、日本の子供の幸福度は総合順位 38 カ国中 20 位であり、子供のウェルビーイング向上も課題である。そこで、本研究の目的は、教員の研修モデルとしてサーベイ・フィードバック研修を、児童の授業実践として特別活動を実施し、両者のウェルビーイング向上に資するか検証することとする。

ウェルビーイングを高める学校教育の在り方

—事例研究を通じた新たな働き方、価値観創造の提案—

上床 肇

帝京大学大学院教職研究科 スクールリーダーコース
キーワード：ウェルビーイング 働き方改革 心理的安全性

I 本研究の背景と目的

文部科学省は教育振興基本計画(2023)において、教育を通じて子供たちのウェルビーイング向上を図るには、教員のウェルビーイング確保が必要であると示した。しかし、現在、教員の長時間労働やそれによる弊害は深刻な状況であり、東京都教育振興基本計画「東京都教育ビジョン(第5次)(案)」内の「基本的な方針11」に示されるように、「学校における働き方改革等の推進」と、それによる教員のウェルビーイング向上は喫緊の課題である。一方で、ユニセフ報告書(2021)によると、日本の子供の幸福度は総合順位38カ国中20位であり、子供のウェルビーイング向上も課題である。以上の背景より、本研究の目的を、教員及び児童生徒が心理的安全性を確保した上で、主体的・対話的に自己決定し活動するという教員研修及び授業モデルを構築し、両者のウェルビーイング向上につながるかを検証することとする。

II 文献調査

研究の目的に迫るために、「ウェルビーイングの定義」、「先行研究による知見」、「自己変革及び組織改革に必要なこと」の3点を整理する。定義について、教育振興基本計画(2023)の「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むもの」とし、学校内で実践可能なことに研究を焦点化する。先行研究より、前野(2019)の「幸せの4つの因子」を主とし、アンケート調査を作成・実施し、主観的幸福を可視化する。中島(2023)の学

校経営、石井(2020)等の共通項である①「心理的安全性」の確保、また、坂田(2019)のリフレクション、センゲ(2011)の組織論等の共通項である②「対話」により前提を捉え直し、自己変革、組織改革を行う点を取り入れ、ウェルビーイング向上に資する教員研修及び授業モデルを構築する。

III 実態調査

混合研究法により、客観性を担保した情報収集及び分析を行う。質的研究は主にエスノグラフィーによる視察とインタビュー調査のM-GTA等による分析、量的研究は主にアンケート調査を分析し、ウェルビーイング向上に資する共通項を探究する。

国内の教育委員会及び先進研究校等3校、また、フィンランド、エストニア、オランダの教育施設6校をエスノグラフィーにより視察し、分析により【対話】、【主体性】、【ありのまま】等の共通項がウェルビーイング向上に寄与している可能性を捉えた。

校長インタビュー調査では、管理職11名に半構造化面接を実施し、M-GTAを参考に分析し、共通項を探った。ウェルビーイング向上を伴う働き方改革には【教員の意識改革】、【校長の在り方】等が課題とされ、【対話】と【心理的安全性】の重要性が示唆された。

教員アンケート調査では、46校、204名に調査を行った。スピアマンの順位相関係数を算出した結果、「勤務時間」は「職場ウェルビーイング」と相関がない($\rho=0.018$ $P<0.01$)一方で、「雑談しやすい雰囲気」と「相談しやすい雰囲気」との間に有意な正の相関関係が認められ($\rho=0.501$ $P<0.01$)、「雑談しやすい雰囲気

気」だと「相談しやすい雰囲気」になる可能性が示唆された。その他の項目含め、職場及び教員のウェルビーイング向上に【心理的安全性】、【対話】特に「相談」が重要である可能性が示唆された。

児童アンケート調査では、A市立A小学校第4学年から第6学年を対象に教員アンケート調査と類似項目で調査を実施し、第1回目、第2回目の主観的幸福の変容を追った。なお、結果はV開発研究にて示す。

教員と児童のウェルビーイングの関係の調査では、A市立A小学校A教諭とA学級、B教諭とB学級の比較からそれぞれの関係を探った。主観的幸福に関して、A教諭はB教諭よりも全21項目の平均値が1.24高く、またA学級の児童はB学級の児童に比べて優位に高かった（マン・ホイットニーのU検定、 $P < 0.01$ ）。

教員インタビュー調査では、本研究のアンケート調査において、ウェルビーイングが高いと回答した学校、低いと回答した学校の教員、計9名へ半構造化面接を実施し、M-GTAを参考に分析し、高いと回答した学校では、【校長の在り方】を一因に【心理的安全性】が確保されていることが示唆された。

以上のII、IIIで明らかになった共通項より、心理的安全性を確保した上で、主体的・対話的に自己決定し活動するという教員研修及び児童の授業モデル（図1）を提案し、検証する。

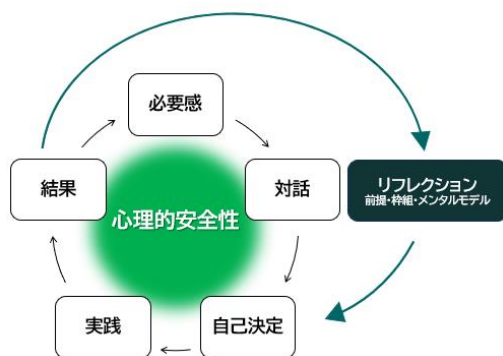


図1 教職員及び児童の学びのモデル

IV 開発研究（教員研修）

II、IIIで明らかになった共通項より、「働き方改革」を推進する教員研修モデルとして中原（2020）が『『データ』に現場の人が向き合い『対話』してこ

そ、現場が変わる」と述べる「サーベイ・フィードバック研修」を提案・検証した。【心理的安全性】を確保した研修となった一方で、今後の変容を追うこと、教員一人一人が当事者意識をもって組織改革をする仕組作りが課題となった。

V 開発研究（児童生徒授業）

II、IIIで明らかになった共通項より、特別活動における学級活動（1）の学級会を授業モデルとして提案・検証した。A市立A小学校A学級において授業実践前後の比較を行い、主観的幸福に関する9項目で、事後における有意な上昇が認められた（マン・ホイットニーのU検定、 $P < 0.01$ ）。また、A教諭へのインタビュー調査より、一授業のみならず日頃より教員が【「幸せの4つの因子」を内包】した風土、特に児童の【「ありのまま」の尊重】をし、【心理的安全性】を確保することが【対話を通じた自己決定】を促し、児童のウェルビーイング向上につながった可能性が示唆された。

VI 総合考察

アンケート調査により学校における主観的幸福を可視化できたことで、研究に一定の客観性を担保することができた。それにより、勤務時間短縮のみならず、対話の空間・時間の設定がウェルビーイング向上を図る可能性を示唆することができた。それらを基に構築した教員研修及び児童の授業モデルについて量的・質的の面から有用性を示すことができた。

一方で、サーベイ・フィードバック研修の普及や持続性、特に、多忙な学校において、これらを実施するための時間確保が課題となることが予想される。だが、どのような自己変革、組織改革もすべては一人の意識改革から始まる。すべての管理職、教職員、そしてその先の児童生徒、保護者、地域等のウェルビーイングを高める学校教育の在り方を、今後も模索し、その普及を継続的に図っていくことが、自身に課せられた使命であると考えている。